

ライフライン

井澤 茉梨絵
稲垣 元則
今井 祝雄
勝木 有香
国谷 隆志
田中 真吾

中屋敷 智生 | 特別参加
松井 智恵 + O JUN | 特別参加

2025.9.12—10.5

茨木市福祉文化会館

福元 崇志 | 企画

井澤 茉梨絵 Marie IZAWA

1992年生まれ。

絵画という枠組みのある空間にしか存在し得ない表現を追求するため、「適応と反発」をテーマにアクリル絵の具で絵画制作を行っている。キャンパスを、水族館の水槽のような制限のある「環境」とみなし、その中でモチーフとなる生き物たちが育っていくようなイメージで描く。絵の中の生き物たちは、「環境」への適応と反発を繰り返し、生きるための形を獲得していく。同時にその「環境」のありようも、生き物の営みによって浮き彫りになる。

主な個展

「土の中にいる人」、space 櫛形、東京、2024

「巨人の化石と絞め殺し植物」、space 櫛形、東京、2022

「植物に育てられた巨人」、space 櫛形、東京、2021

主なグループ展

「TOKAS-Emerging 2025『生き物の形、環境の形』」、トーキョーアーツアンドスペース本郷、東京、2025

「アートアワードトーキョー 丸の内2017」、行幸地下ギャラリー、東京、2017



巨人の身じろぎ、2025
撮影：加藤 健 画像提供：Tokyo Arts and Space

稲垣 元則 Motonori INAGAKI

1971年生まれ。

20歳の1992年より同サイズのドローイングを継続して制作。ドローイングの進行や展開が自身の思考や活動のベースとなる。並行して写真や映像の作品を制作し、継続と経年の観察による、成長や老い、個人や社会の時間の歪みや逆行、飛躍について考える。

主な個展

「Painting」、ギャラリーノマル、大阪、2023

「Longitudinal」、Art space & cafe Barrack、愛知、2023

「Untitled」、2kw gallery、滋賀、2022

「100 Jahre」、ギャラリーノマル、大阪、2022

主なグループ展

「PLUS- A Project for an Aging World」、WELTKUNSTZIMMER、デュッセルドルフ、2021

「ライアン・ガンダーが選ぶ収蔵品展：ストーリーはいつも不完全……」、東京オペラシティアートギャラリー、東京、2021

「Gather - Gift.」、ギャラリーノマル、大阪、2019

「コレクション2：80年代の時代精神（ツァイトガイスト）から」、国立国際美術館、大阪、2018



Wons, Eert、2022

今井 祝雄 Norio IMAI

1946年生まれ。

17歳のとき、大阪のヌヌ画廊における初個展を機に第14回具体展に出品、翌1965年に具体美術協会の最年少会員となった。具体展では主に半立体的な白の作品群やモーターで動く作品も発表している。1972年の具体解散後は、写真や映像や音響、また自分の身体などを積極的に用い、ジャンルや自己表現にこだわらない制作を展開、現在に至る。1980年代以降、パブリックアートも多数手がけている。

主な個展

「今井祝雄ー長い未来をひきつれて」、芦屋市立美術博物館、兵庫、2024

「今井祝雄 - 物質的恍惚」、アクセル・ヴェルヴォールト・ギャラリー、ベルギー、2018

主なグループ展

「コレクション1 - 戦後美術の円・環」、国立国際美術館、大阪、2025

「風景論以後」、東京都写真美術館、東京、2023

「具体：素晴らしい遊び場所」、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク、2013

「時間／美術 20世紀美術における時間の表現」、滋賀県立近代美術館、滋賀、1994

「現代美術による写真 1970年代の美術を中心として」、東京国立近代美術館および京都国立近代美術館、東京／京都、1983-1984

「第5回パリ青年ビエンナーレ」、パリ市立美術館、パリ、1967



Two Heartbeats of Mine II、1976 / 1993
撮影：細川和昭

勝木 有香 Yuka KATSUKI

1996年生まれ。

動くことで変化する形・線のトレースを繰り返し「動き」そのものを探る。たとえば、ボールが上下にバウンドする時、コマ撮りで見えていくと、地面に接触するとボールは重力によって形が崩れ横に広がり、跳ね上がると縦に伸びる。この一連の「動き」の流れをトレースし形・線を引き出し「動き」そのものを平面に圧縮する感覚で再構成していく。“何か”が動いていた→?”が動いていたへと変わり、それらを画面上で表した時、一体何を見ていることになるのか。“何か”が排除された「動き」のみを可視化することを探り制作している。

主な個展

「SKIP AND SCENE」、Kunst arzt、京都、2024

「LETTING GO OF BALLOON」、CANDY BAR gallery、京都、2023

「SYMPHONY」、GOYO gallery、東京、2023

「FLOW AREA」、Kunst arzt、京都、2020

主なグループ展

「Dialogue of Print」、K Art Gallery、東京、2025

「めくられるページ、横切るハト。」、シャトー小金井、東京、2022

「ウィルヘルミーの吊り板」、Media shop、京都、2020

「ピンボケの影像」、神戸アートビレージセンター、神戸、2020



Bed wrinkles、2024

国谷 隆志 Takashi KUNITANI



Untitled、2025
撮影：Takateru Kusaki

1974年生まれ。

自分を取り巻く世界において、人が占めている位置、身体、空間、時間、光、物の配置による人の視点や移動といった、物事についてのあり方や人はそれらとどのように向き合うのかといった関心から、鏡や砂時計、ネオン、鳥の羽、蚊取り線香などの素材を使用して彫刻やインスタレーションといった表現手法で発表を続けている。

主な個展

「私は熱帯雨林で新種の動物を発見しました。」、+ 1 art、大阪、2025

「Mix and Match」、Uterior Gallery、ニューヨーク、2023

「Aura」、Yutaka Kikutake Gallery、東京、2020

「Spaceless Space」、Uterior Gallery、ニューヨーク、2018

主なグループ展

「SKETCH」、OAG Art Center Kobe、神戸、2024

「The Practice of Everyday Practice 日常の実践の練習」、名古屋芸術大学アート & デザインセンター、名古屋、2021

「NADA House 2021」、House 403、ニューヨーク、2021

「Medium of Exchange」、SHIRLEY FITERMAN ART CENTER(SFAC)、at Borough of Manhattan Community College、ニューヨーク、2019

田中 真吾 Shingo TANAKA

1983年生まれ。

火は、道具としての側面と制御し切れない暴力性を同時に兼ね備えている。組み上げた構築物を燃やし、崩れた素材を新たに組み直す行為を反復することで、火が持つ両義性を作品の中で等価に扱うことを試みている。近年はこの手法を展開させ「線を引き、それを拭き取る」ことで描く絵画作品など、素材や形態を横断しながら制作を行なっている。

主な個展

「ツァラトウストラ」、2kw gallery、滋賀、2024

「STRIDES by strokes」、eN arts、京都、2023

「たれそかれ」、A' holic、東京、2021

「Phantom Edge」、ギャラリー PARC、京都、2017

主なグループ展

「粋な粹」、2kw gallery、滋賀、2025

「Idemitsu Art Award 2023」、国立新美術館、東京、2023

「VOCA 展 2019 現代美術の展望ー新しい平面の作家たち」、上野の森美術館、東京、2019

「TAMAVIVANT II 2016」、多摩美術大学、東京、2016



transtructure#07、2020
撮影：Tomas SVAB

中屋敷 智生 Tomonari NAKAYASHIKI

現代美術ー茨木特別展「Transfer」から継続参加



There is、2024
撮影：Tomas SVAB

1977年生まれ。

国内外の展覧会やアートフェアへの参加多数。近年は、絵具と同じ画材・メディウムとしてマスキングテープを使用しており、カラージュのようなレイヤーとテクスチャーを持つ絵画作品を数多く発表している。図と地の関係が常に入れ替わるようなこの手法によって、対象を視覚的に認識することの不確かさや、絵画と鑑賞者という伝統的な二元論を超えた絵画作品のあり方を探求している。

主な個展

「内と肉」、YIRI ARTS、台北、2024

「ばからくう」、2kw gallery、滋賀、2024

「明日ま、た明、日また明日と小さざ、みな足、取りでー、日ー、日を歩む」、KOKI ARTS、東京、2023

主なグループ展

「現代美術ー茨木特別展「Transfer」」、茨木市福祉文化会館、大阪、2025

「Bunkamura Gallery Selection 2025」、Bunkamura Gallery 8 (渋谷ヒカリエ 8F)、東京、2025

「中屋敷智生 × 光島貴之 〈バラリズム〉」、KOKI ARTS、東京、2025

「中井浩史 × 中屋敷智生 × 田中真吾『粋な粹』」、2kw gallery、滋賀、2025

「中屋敷智生 × 光島貴之 〈みるものたち〉」、BUG 株式会社リクルートホールディングス、東京、2025

松井 智恵 + O JUN Chie MATSUI + O JUN

松井智恵は real SOU #15「野原の上で」から継続参加



縁側の立ち話、O JUN+ 松井智恵、2016
撮影：山口卓也

松井智恵

1960年生まれ。現在は主に「絵」を中心に制作。多素材によるインスタレーションや映像表現も含め、作る身体と作られた視覚のあり方を探る。越境行為から生まれる物語の装置が日常化した中で、一日の終わりに素描を1枚描くことを続けている。

主な個展

「Picture- リチャベル・アテル」、MEM、東京、2025

「置き去られた鏡」、ギャラリーノマル、大阪、2024

「松井智恵全映像作品上映会」、埼玉県立近代美術館、埼玉、2023

「平成26年春の有隣荘特別公開 松井智恵「ブルジャ」」、有隣荘、岡山、2014

O JUN

1956年生まれ。画家。絵画、パフォーマンスなどによる表現を行っている。個展、グループ展など多数。

主な個展

「途中の造物」、ミヅマアートギャラリー、東京、2019

「描く児」、府中市美術館、東京、2013

「近作展 27」、国立国際美術館、大阪、2002

主なグループ展

「六本木クロッシング 2022」、森美術館、東京、2022

茨木市福祉文化会館の命脈が、いま、尽きようとしている。シアターあり、ギャラリーあり、会議室あり、さらには市の水道部や社会福祉協議会まで併設されたそれは、日本にいくつもある総合的な文化施設の一つだ。ご多分にもれず、ここ福祉文化会館もまた、さまざまな機能を備えているから「多目的」、しかしだからこそ何をするにも中途半端で「無目的」、などと揶揄されていたのかもしれない。

では、こうした総合への志向はとっとと捨てて、専門分化をひたすらに推し進めるべきか。答えは否、であってほしいし、あるべきだろう。劇場やコンサートホールや美術館など、ある目的に奉仕する施設が重要なのは間違いないが、それはまた特定のジャンル、特定の媒体に閉じることにもなりえる。

重要なのは、ただ繋げたり分けたりと、白黒はっきりつけるのではなく、むしろ繋ぎつつ分け、分けつつ繋ぐという、どっちつかずな状態に居心地悪くとどまり続けることではないか。そもそもひとは、言葉を発した瞬間、あるいは一本の線を引くことによって、つねにすでに何かと何かを分けている。だが、取り返しのつかない「線引き」なんて、きつとないにちがいない。

本展覧会では、主に関西を拠点に活動する美術家たちの、仕切っては仕切りなおすいくつかの実践に光を当ててみよう。提示される作品は絵画、彫刻、素描、映像、インスタレーションと様々だが、曖昧な中間領域にアプローチしようとする姿勢は共有されているはずだ。

あちらとこちらを分かつ一本の線は、同時にまた、別の何かと何かを繋ぐ線でもありえる。複雑に絡み合い、もつれあうネットワークの全体が、私たちの生活を支える、ライフラインとなるように。何らかの枠を仮構しつつ、それを壊して別様に仕立て直すというその表裏一体は、「総合」のるつぼのなかでこそ顕在化するだろう。

企画 | 福元 崇志 (国立国際美術館)

井澤 茉莉絵
稲垣 元則
今井 祝雄
勝木 有香
国谷 隆志
田中 真吾

Marie IZAWA
Motonori INAGAKI
Norio IMAI
Yuka KATSUKI
Takashi KUNITANI
Shingo TANAKA

中屋敷 智生
松井 智恵 + O JUN

Tomonari NAKAYASHIKI | 現代美術-茨木特別展「Transfer」から継続参加

Chie MATSUI + O JUN | 松井智恵は real SOU #15「野原の上で」から継続参加

イベント | ギャラリートーク

企画者・福元崇志による展示解説 ※詳細はInstagramで告知します

① 9月13日(土) 15時~16時30分

② 9月20日(土) 15時~16時30分

茨木市福祉文化会館 1階集合 参加無料 予約不要

2025年9月12日(金) ————— 10月5日(日)

12時 ————— 19時

休館日 | 9月16日(火)、17日(水)、24日(水)、29日(月)、30日(火)、10月1日(水)

入場無料

茨木市福祉文化会館 (オークシアター)

〒567-0888 大阪府茨木市駅前4丁目7-55

阪急茨木駅より西へ徒歩10分、JR茨木駅より東へ徒歩10分 ※会場に駐車場はありません(お近くの市営駐車場、コインパーキングをお使いください)

お問合せ先 |

公益財団法人茨木市文化振興財団 文化事業係 TEL 072-625-3055 (10:00-17:00)

<https://www.ibabun.jp> 〒567-0888 大阪府茨木市駅前四丁目6番16号

主催 | 公益財団法人茨木市文化振興財団 後援 | 茨木商工会議所、茨木市観光協会

公益財団法人
茨木市文化振興財団
IBABUN
Bari City Cultural Foundation

@lifeline_oaktheater
イベントなどの最新情報はこちら

